

「イースター おめでとう」

2017年04月19日

今年のイースター（復活日）は4月16日で、例年に比べ遅い日であった。春分が過ぎて満月を迎えた後、最初の日曜日に当たるからである。月齢の暦を持つユダヤでは、この頃、過越の祭を祝う。主イエスが十字架で殺されたのは過越の時で、主イエスの十字架と復活日は歴史的に正当性がある。主イエスの降誕日のクリスマスは12月25日であるが、歴史的根拠はない。冬至の頃、行われていたローマの太陽神礼拝に対し、「義の太陽」の主イエスを真の神と主張し、12月25日を降誕日にしたのである。

日本では、クリスマスはよく知られ、クリスチャンでない人も「メリークリスマス」と言うようになり、町中で大騒ぎをしている。キリスト教と関係すると言われるバレンタインディやハロウィンなども商業主義に絡んで、お祭り騒ぎになってきた。最近では、ハッピーイースターと呼び、卵形のお菓子なども売り出している。

主イエスの復活がキリスト教を宗教として誕生させた決定的な出来事であった。ヨーロッパでは、春の到来の喜びと重なり、イースターを盛んに祝うそうである。日本でイースターが真に祝われるようになった時、キリスト教が根付くであろう。

私は隠退後、横浜本郷台教会の礼拝に行っている。バス一本で行けるし、バス時刻の都合もよい。横浜港南台教会員であった佐野匡兄が定年後、Cコース（独学）で牧師になり、横浜本郷台教会で伝道、牧会している。一般家屋を礼拝堂にし、十数名が集うこじんまりした教会で、皆熱心に信仰を励まし合っている。佐野牧師はイースター礼拝で、ヨハネ福音書20章1節～18節から「キリストの復活」と題して説教された。福音書は、主イエスを埋葬した墓が空になったこと、主イエスは復活して「生きておられる」というメッセージからなっている。マグダラのマリアは重い精神障害を負っていたが、主イエスに癒され、従うようになった。復活の主イエスに最初に出会ったのは彼女で、「わたしは主を見ました」と証言し、復活信仰が広まった。佐野牧師は、イエスが共におられるという信仰が復活信仰であると力説された。

聖書が告げる死人の復活はあり得ないことなので、大きなつまずきになり、色々な解釈がある。私は次のように信じている。主イエスの復活は肉体の復活ではない。最初の復活証言を書いたパウロは、コリント書（一）15章42節～44節で「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです」と、復活は朽ちる自然の命の体ではなく、朽ちない霊の体の復活であると書いている。初代教会の弟子たちとパウロは霊の体の主イエスと出会った。この事実がどのようなことであったかは分からない。十字架の死から復活し、生きておられる主イエスと出会い、死を超えた神を認めざるを得なかった。これは、信仰における認識である。だから、ヨハネ福音書20章29節で、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と書いている。

今日は私の76歳の誕生日で、イースターの夜、家族で祝ってくれた。自分と世の中に絶望し死を願っていた私が復活の主イエスを信じ、共にいてくださると信じ、76年も生かされてきた。その信仰によって、復活した主イエスの命に日々与ってきたと思っている。復活信仰は人を生きよと立ち上がらせ、死を超えた命への望みである。